

## (1) 基本的に

中焦の病は、体の内側の横隔膜より下、臍より上に主な症状が出る病で、消化器系とも言える。水毒によることが多く、足の陰経（特に太陰経）や、横輪切りの背中側（特に胸椎の7-9-11）に引きやすく、症状の近くの大腹にもツボが出る。

2000年以降、中焦の水毒から発生した邪気が上焦・表位の病の原因となる例が多く、肩腕にピリピリするシビレ感や慢性的な頭痛や眩暈などを訴える人が増えている。狭心症を疑われ検査したが正常という人が、左大腹の水毒を減らす治療で改善した。また、線維筋痛症の発症時と似ている人も多い。

中焦に水毒がある場合には、鳩尾の近くを中心に横隔膜の腹側が硬くなっている（心下痞硬）。腹よりの肋骨を押すとパンパンに張っていて弾力がない（胸脇苦満）ことも多く、左右差があることも多い。

中焦が水毒で硬くなっていると、下焦の瘀血や中焦の水毒から発生した邪気が上衝できずに溜まってしまう。溜まった邪気が限界を越え鉄砲水のように上衝すると、卒中と呼ばれる事態になると聞いた。

消化器系の病で器官の変性がないときは、左中焦のガス停滞を無くすと改善することが多い。

また、水毒が肩首にあれば凝り、内耳にあれば耳鳴り・眩暈、上焦にあれば咳・痰の原因となる。それぞれ、主症状に関係する治療の他に、中焦の水毒を減らす治療を加える。

下半身の浮腫は、小腹(下焦)や足厥陰経（少陰経）との関連が深い。

## (2) ツボが出やすい所

### ① 足の陰経

太陰経が多い。慢性期には、膝の近くの陰陵泉や大腿にツボが出る。急性期には、足首より先、商丘、公孫、接触鍼なら陰白。灸なら節紋、裏内庭、第2指裏横紋など親指2指のツボ。地機、漏谷は、急性慢性両方に使う。

他の陰経に出ることもある。

### ② 足の陽経

腹の表面の痞りは下腿・足甲の足陽明～少陽に引く。灸なら足指のツボも使う。慢性期には、伏兎～梁丘、風市など大腿部にも出る。腹のツボが、上脘兪など正中線の近くのとときには脛骨の直

ぐ脇に出やすく、章門など横腹の近くのとときには豊隆のラインや足少陽に出やすい。

下半身の冷えが関係するときは、足甲3-4間のツボを補の灸でじっくり温める。

### ③ 陽位(背)

先ず胸椎7-9-11の1,2行線、督脈、華佗経で、昔から「胃の六灸」に使う辺り。慢性期には、華佗経（＝背骨の直ぐ脇）や、痞根（＝腰椎部分の脊柱起立筋の一番外側の肋骨側）に多い。

### ④ 腹部

肋骨下の不容、章門、任脈の中脘、臍周り、臍の横の天枢など。慢性期には、横腹の章門、臍近くの上脘兪が多い。

### ⑤ そのほか

手の陰経、中でも厥陰経に出やすい。慢性期には上曲沢。急性期には内関。

## (3) 手順（慢性期）

ツボを考慮して慢性期の型の順で刺鍼。初めに刺鍼する手の陰経のツボは上曲沢が多い。冷えて虚している所や華佗経などにある古いツボに灸・灸頭鍼をし、手の指端の灸で後始末。

灸や灸頭鍼と置鍼を組み合わせてもよい。手の骨空で始め、座位、うつ伏せ、仰向けの順で、ツボを選び、施術し、手指端の灸で後始末。腹への灸は、腹の邪毒の状態でも可否を判断。邪毒実、つまり炎症性の熱感が強いときは、避ける。

## 要点

- ① 中焦の病は、水毒によりことが多い
- ② 中焦の病は、足太陰経に引きやすい
- ③ 中焦の腹側や背中側にもツボが出る